

# 令和5年度結核対策推進会議に参加して

神奈川県平塚保健福祉事務所

保健予防課 兼任 千恵

令和5年度結核対策推進会議のテーマは、「結核低まん延下でのこれからの対策～学校保健や新技術に着目して～」であり、令和6年3月8日にウェブ開催された。アクセス数は合計で501件だったとのこと、この会議が結核対策に従事する多くの方々の学びの場となっていることが伺われた。

講義では、検査技術や患者支援事業なども含め、結核対策の最新情報を得ることができた。令和4年のわが国の結核罹患率（人口10万対）は8.2であり、前年の令和3年に引き続き、結核低まん延国の水準である10.0以下を維持している。結核罹患率そのものは低下傾向にあるが、高齢者で罹患率が高いことや、外国出生者の占める割合が増加していることなどの特徴は変わっていない。新型コロナウイルス感染症の影響による受診・診断の遅れも指摘されており、高齢者の健診受診率向上や外国出生者に対する入国前結核スクリーニングなど、早期発見対策が重要であることを改めて確認した。結核治療中の外国出生者が帰国する際の支援としては、令和5年9月末で受付を終了したBRIDGE TB CARE (BTBC)（結核医療国際連携支援）のあとを受けて、帰国時結核治療継続支援（Kikoku-TB Care）が開始されており、積極的に活用していければと思った。抗酸菌検査に関しては、良質な喀痰の採取が結果の信頼性を左右することから、ラングフルートの活用や、喀痰以外の検体の利用も進められているとのことであった。

ワークショップ「学校保健の結核対策」では、これまであまり聞く機会のなかった小児結核（15歳未満）についてお話を伺うことができた。令和4年のわが国の小児結核症例は35人であり、小児結核罹患率は世界で最も低い水準となっている。小児結核の症例数が少なくなった結果、学校関係者や保健行政スタッフ、小児科医などにおける小児結核への関心が低下する

と、受診・診断の遅れから大きな集団感染事例につながる可能性も憂慮される。今回のようなワークショップや、机上演習などをおして、健康危機管理能力を高めていくことが重要であると感じた。また、小児結核症例においても、外国出生者の占める割合は約25%と高く、高まん延国での居住歴・滞在歴がリスクとなる。ネパール生まれの女児を発端とした集団感染事例に関して、診断までの経過や接触者健診の検討過程などを紹介していただき、実際の対応を具体的にイメージすることができた。患児が偏見・差別の対象にならないような配慮や、療養中の学習支援など、教育現場で問題となってくるポイントについても学ぶことができた。

今回の結核対策推進会議で得た知識を日々の業務に生かしていくとともに、今後もこのような学びの場に積極的に参加していきたいと思う。🐱

## 令和5年度結核対策推進会議 WEB開催プログラム

日時：令和6年3月8日（金）13:00～16:45

### <講演>

- 座長挨拶 結核研究所 太田正樹
- ① 結核対策最新情報  
厚生労働省 健康・生活衛生局 感染症対策課 松浦祐史
  - ② 結核検査の新技術  
結核研究所 御手洗聡
  - ③ 抗酸菌検査の注意点とラングフルート ECO の活用  
大阪複十字病院 伏脇猛司
  - ④ 帰国時結核治療継続支援 (Kikoku-TB Care)  
結核研究所 座間智子

### <ワークショップ「学校保健の結核対策」>

- 座長： 国立病院機構京都病院 徳永修  
結核研究所 平尾晋
- 基調講演 文科省「学校において予防すべき感染症の解説」のポイント  
結核研究所 所長 加藤誠也
- ① 学校現場の立場から  
元公立中学校長 [現 東京都教職員研修センター所属] 小沼孝行
  - ② 外国生まれの小児を発端とした結核集団感染事例  
大阪市保健所 森本哲夫
  - ③ 小児科医の立場から  
大阪はびきの医療センター 釣永雄希

### 全体討議

統轄 国立病院機構京都病院 徳永修